

理学部の14年から

岩 槻 邦 男 (附属植物園)



過ぎてしまえば早いもので、京都大学に本務を置いたままで併任教授として研究教育に関わった2年間を含めて、14年も東京大学理学部で生きさせていただきました。日本の国立大学が最も酷しい状況に置かれていた時期でもあります。私自身は、忘れ去られていた生物多様性の研究が、生物学自体の課題としても、社会的要請からも、それなりの注目を浴びるようになった時期に、良い研究仲間にも恵まれて、研究者として楽しい日々が過ごせたことが何よりの日々でした。とはいっても、自分自身は研究環境の整備のために駆けずり廻ってばかりだったのですが、それは東大生活の大部分を植物園の責任者として過ごしたことも関わりのあります。

植物園を大事に思って下さる方々に護られて、私の在任中だけでも、教官ポストの純増、施設経費の増、本館の改築、実験温室の新営など数多くの手当てをしていただきました。しかし、長い間放置されていて、欧米の類似施設と比べれば、文字どおり桁違いに劣悪な条件に喘いでいたところですから、このまま国立大学の環境劣下の一端を荷なっていたのでは、折角の施設がその機能を果たせなくなってしまうこともあるのではないかと心配です。

今年度末で東京大学理学部を退官するのは私1人です。他の理学部関係者は大学院理学系研究科を退官されます。施設センターの大学院への移行についても、植物園や臨海実験所など、設立の時期が古かったために教育実習施設となっているところは、実質的には研究施設と同じ研究教育活動をしながら、かたちのために別の評価を受けることになるのは残念なことです。昨年12月に植物学専攻・植物園で外部からの委員に評価をいただいた結果では、設置形態には関わりなく、国内外の委員は等しく研究単位としての植物園を見て下さっています。

植物園の役割としては、毎日の研究教育に成果をあげることと並行して、研究の資料や情報など、大金を積んでも即刻入手することの困難な要求への長期的な対応としての植物の系統保有や資料標本、文献の維持などの業務があり、それに関連して、保全生物学への貢献など、生物多様性の持続的利用を課題とする社会的要請に応じる責任も最近では課されています。社会に開かれた大学として、大学の理学部における基礎的な研究が社会に貢献する場としての植物園が、理学部の皆様にも、東京大学の皆様にも、そして東京大学からは去る私を含めて日本人の、世界中の人々の愛する施設であり続けるようにと祈念しています。

私自身は東京大学在任中は大学のこと、学界のこと、とりわけ植物園のことなどへの対応のため、狭い意味で私自身がやりたかった研究活動などが制約されていたことを気に病み続けておりました。4月からは引き続き研究のできる場で、いろいろ被っていた責任を少しずつ軽くしていただいて、自分の好きな研究活動に戻ることができたらと思っております。東京大学理学部における研

究教育がますますの成果につながるよう期待しながら、私もそれに負けない研究成果を上げたい

のと念じております。

長い間ありがとうございました。

岩槻邦男先生を送る

加藤 雅 啓 (植物園)

岩槻先生は1981年4月、当時の京都大学理学部教授から本学理学部附属植物園教授併任、1983年4月同専任になられた。それ以後12年間で植物園長を4期のべ10年務められたので、ほとんどの在職期間、園長という重職を担ってこられたことになる。当初から研究室の充実に力を注がれ、主要設備備品を整えられたおかげで、私たちは恵まれた条件で研究を行うことができた。また、助教ポストの純増を実現され、研究の陣容を拡大された。そればかりでなく、植物園さらに理学部の職員とくに技術官の待遇改善に尽くされ、また職場環境の改善充実を図られた。とくに、理学部のご支援を得ながら実現した研究温室と園内環境整備は植物園での研究ならびに植物育成の環境を飛躍的に改善するものであった。これらはいずれも植物園で研究し働く私たちにとって大変ありがたいことであった。長年にわたって植物園の発展に尽くしていただいたことに改めて感謝いたします。

岩槻先生はこのように「みんなに尽くす」タイプの方である。それはもちろんご自身が置かれたお立場と責任を全うされたことを意味するものである。1992年10月から2年間は評議員として全学的なお立場からご尽力された、「みんなに尽くす」ご努力は学界でも続けられた。日本植物学会、日本植物分類学会の両会長、日本植物園協会会長、国際植物園連合会長、国際生物科学連合日本代表、第15回国際植物科学会議組織委員会総務委員長などの重責を精力的にこなされた。これらの多くは同じ時期であり、私たちの眼には超人的なお働きとして映った。

このような岩槻先生のご献身さを支えているものは一体何なのだろうかと考えたことがある。人一倍強い責任感をもっておられることはいうまでもないが、そこまでしなくてもと思うほど人の長所を評価されるひとの良さと、相当困難な事柄でも何とかなると引き受けられる楽観論者であることが私が得た結論である。見習いたい、ととてもまねのできるものではない。

さて、先生は昨年6月日本学士院エジンバラ公賞を受賞された。その喜びを分けていただいたのは、一緒に研究させていただき弟子の一人である者として光栄であった。受賞研究は「植物の多様性の解析およびその滅失に関する保全生物学的研究」である。まことに先生のご活躍にふさわしい受賞であった。ところで、今日「生物多様性」という言葉が研究者の間だけでなく一般社会でも普通に使われていることに関してあまり知られていない点に、先生の近くに長くいた1人としてちょっと触れておきたい。それは先生が生物多様性の研究で世界的に高い評価を受けられただけでなく、その重要性をわが国で他分野の研究者からも理解が得られるようにと、ずっと前から長く根気強く訴えてこられたことである。「生物多様性」とその研究の認知に腐心されたそのご努力が近頃の「生物多様性」の定着、さらには生物科学専攻での進化多様性大講座の実現につながったと私は見ている。「生物多様性」がいかにか先生のご研究の核心であったかは、最近書かれた教科書の題名が「多様性の生物学」であり、最終講義の演題が「植物の種多様性を究める」であったことが